トリスタンの末裔
—— テーオドール・シュトルムの『遅咲きの薔薇』における『トリスタンとイゾルデ』への言及について ——

田淵昌太

1848年3月から1850年7月にかけての，シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン地方におけるデンマークからの独立運動に関る動乱のなか，弁護士シュトルムは一貫してデンマーク支配に異を唱えていた。しかし結果的にデンマークの主権が認められるや，反デンマーク運動に熱心だったシュトルムは1852年11月22日，デンマーク政府によって弁護士業に必要な認可を取り消されてしまう[1]。郷里で法律家として働くことができなくなったシュトルムは，ポツダム（1852-1856）を経てハイリゲンシュタット（1856-1864）の地に移り住む。そしてこの町で『遅咲きの薔薇』[2]を書きあげたのだった。

1

テーオドール・シュトルムの『遅咲きの薔薇』はさしあたって，仕事に忙殺され妻を放置していた男があるとき妻の魅力に改めて気付く話，と要約できるだろう。このノヴェレは研究史において，どのように読まれてきたのだろうか。

レギーナ・ファゾルトは「夫婦関係の話である『遅咲きの薔薇』は［…］研究の場ではほとんど注意を払われていない」[3]としている。しかし評価が皆無というわけではない。

> 「ポツダムからハイリゲンシュタットに移って，彼にも静かな日がきた。そしてそのとき，彼の美しい，三十歳の半ばに近い妻は，かすかに老いの影をみせていた。彼がそこを去らねばならぬと知ってから特別の愛情をもって故郷を抱いたように，いまや妻にたいする情熱がつよく詩人に目ざめてきた。そしてこの体験にもとづいて，次の

---

[1] Vinçon, S.38, カルル・エルンスト・ラーゲ『シュトルムの生涯と文学』53頁，宮内芳明『シュトルム』42-43頁および53頁，加藤丈雄『シュトルム・回想と空間の詩学』187頁参照。

[2] „Späte Rosen“. 1859年，ハイリゲンシュタットにて執筆。1860年『アルゴー』誌（ブレースガウ）に初出。小改訂を経て1861年，『ヴェローニカ』『広場を隔てて』とともに『ノヴェレ三篇』としてシンドラー社（ベルリン）より刊行。再度わずかな改訂を経て1868年，『著作集』（ブラウンシュヴァイク）に収録。本稿では1868年版の『著作集』を底本とした Theodor Storm, *Sämtliche Werke in vier Bänden.* Bd.1（いわゆるフランクフルト版全集）に基いて引用を行う。

[3] Fasold, S.110.

春，この小品が書きおろされたのだった。」[4]

こうした従来の『遅咲きの薔薇』理解は，ベアーテ・シャルロッテ・ゲーラーの次のような見解に集約されると言っていい。

「1859年に，地方裁判所判事テーオドール・シュトルムは，新しいノヴェレを書きあげた。この新作をもって，シュトルムは妻コンスタンツェに愛情を告げ知らせたのだった。

ノヴェレ『遅咲きの薔薇』では，ある一家の父親［＝ルードルフ］が扱われている。この父親は，失われた青春時代を懐しみながら，過ぎ去っていった年月のなかで無意識のうちに自分が妻にどれほど多くの愛情を注いでいたのか，長年の結婚生活を経た今，初めて思い到ったのである。このノヴェレにおける『妻』という登場人物の実在するモデルとして，コンスタンツェ・シュトルムが使われていることは明白である。」[5]

このように『遅咲きの薔薇』はシュトルムの，妻コンスタンツェへの愛情の発露として読まれることが多い。おそらくコンスタンツェ自身もそう受け止めていたことだろう。事実，作品執筆の契機はハイリゲンシュタット時代にコンスタンツェが一時的に帰郷した際，あとに残ったシュトルムが婚約時代にやりとりした手紙を読み返したことにあった[6]。

この作品を素直に，というよりも表面的に読むと，円満な夫婦を描いた好ましい作品という評価が出てくることは別段，不思議ではない。しかし，この作品の理解はそこで立ち止まってしまっていいのだろうか。

2

『遅咲きの薔薇』には，さりげなく「バルト海」が描写されている。まずは，その場面を確認することから始めたい。

「十月のさわやかな午後のことだった。仕事を終えた友人は町から戻ってきたばかりで，私たちはさっそく昔話に花を咲かせながら，別荘の正面のテラスに腰を下ろしていた。そのテラスからは低めにしつらえられた庭とそれに隣接する緑の草原越しに，バルト海の暗い水を湛えた入江と，その向こうのなだらかに盛りあがった樅の林とが見渡せた。樅の葉はもう色づき始めている。」[7]

---

[4] シュトルム（関泰祐訳）『みずうみ 他四篇』解説 141-142 頁。
[5] Göhler, S.198.
[6] LL-1, S.1088.
[7] LL-1, S.427 f.

物語はこのバルト海沿岸の別荘地を舞台に進行する。作品中で具体的に言及されたのは，この一箇所だけであるが，バルト海は『遅咲きの薔薇』という物語の傍らに，常に佇んでいる。我々読者は，そうしたバルト海の存在を忘れてはならない。

なぜバルト海に注目する必要があるのか。それはシュトルム文学において，水にまつわるトポスは極めて重要な意味を持つからである。

シュトルムの作品において，不倫，重婚，身分違いの恋など，現世における市民的な生活秩序にそぐわない行為に走ろうとする者には〈暗い水〉からの警告がある。〈暗い水〉からの警告というのは，端的に言うと溺れかけるということである。

その警告を受けて自らの不穏当な行為を思いとどまれば溺死することはない。たとえば『みずうみ』[8]のラインハルトは，旧友エーリヒに嫁いだエリーザベトへの思慕の念を捨てきれなかったため，夜の湖で溺れかける。〈暗い水〉から警告を受けたラインハルトは，結果的にエリーザベトへの思いを胸の奥底に封じ込め一線を踏み越えることがなかったので，命を落とさずに済んだ。

しかし〈暗い水〉からの警告を無視して許されぬ恋路を突き進めば，最終的には溺死という結果が待ち受けている。そうやって破滅していった登場人物はシュトルム作品において枚挙に暇がない。身分違いの恋に走った『大学時代』[9]のレノーレ，既婚者でありながら不倫の恋路をひた走った『荒れ野の村』[10]のヒンリヒ，身分違いの恋人どうしの間に生まれた『水ニ沈ム』[11]のヨハネス坊やなどが〈暗い水〉の裁きを受けて破滅していった登場人物たちである。『管財人カルステン』[12]では，酒びたりの放蕩息子ハインリヒが嵐の夜，高潮に飲まれて命を落とすが，これはまっとうな市民としての暮らしを送ることができなかった人物の哀れな末路であった。

かくのごとくシュトルムの作品において現世の市民秩序からはみだしてしまう者たちは，その倫理圏のなかで居場所を失い，陸続と〈暗い水〉に飲み込まれて命を落としていく。要するに，こうした登場人物たちは市民社会から排除されていくのである。

また実際に裁きを下しにこないまでも，〈暗い水〉は作品の片隅にそっと描かれて，登場人物たちの行動を監視している場合もある。『広間にて』[13]，『広場を隔てて』[14]，『ヴェローニカ』[15]などが，これに該当する。これらの作品においては作品冒頭にさりげなく描かれた〈暗い水〉が，登場人物が現世の市民秩序を乱す「道に外れた恋」や「分不相応な出すぎた行為」に走った場合には否応なく彼らを水に引き込んでしまうべく，虎視眈眈と待

---

8 „Immensee“（執筆 1849／初出 1850［決定稿 1851］）。
9 „Auf der Universität“（執筆 1862 年／初出 1863 年）。
10 „Draußen im Heidedorf“（執筆 1871 年／初出 1872 年）。
11 „Aquis submersus“（執筆 1875-1876 年／初出 1876 年）。
12 „Carsten Curator“（執筆 1877 年／初出 1878 年）。
13 „Im Saal“（執筆 1848 年／初出 1849 年）。
14 „Drüben am Markt“（執筆 1860 年／初出 1861 年）。
15 „Veronica“（執筆 1861 年／初出 1861 年）。

ち構えているのである。

幸い『広間にて』『広場を隔てて』『ヴェローニカ』といった作品においては，主人公が倫理的に許されざる道に踏み込んだり，身分不相応の出すぎた振舞に出たりすることがなかったので，あるいは，そうした行動をぎりぎりのところで思いとどまることができたので，〈暗い水〉は作品の片隅に佇んだまま，その恐るべき効力を発揮することはなかった。

しかし，だからといって〈暗い水〉の作用が雲散霧消したわけではない。シュトルムのノヴェレを読むに際しては，現世の倫理秩序にもとる行為に走った者を処断する〈暗い水〉が常に監視の目を光らせているということを，忘れてはならないのである。

こうした〈暗い水〉を頻繁に描いていたシュトルムの作品においては，池・沼・湖・水車小屋・湿地・海など，水にまつわるトポスには必ず何らかの意味がある。だから水の描写があった場合には，読者として片時の油断もできない。その意味で，この『遅咲きの薔薇』にさりげなく描かれたバルト海にも，注目しないわけはいかないのである。

3

作品の冒頭で〈暗い水〉が描かれたということは，つまり，その作品のなかで現世の秩序に違反する行為が行われる可能性があることを示している。〈暗い水〉は現世の市民秩序の監視役だからである。その観点から『遅咲きの薔薇』を読み直してみると，気になることが出てくる。

「『[…] 書物などというものを，ぼくはもう長いこと顧る暇（いとま）を持たなかったんだ。[…] ぼくが手にしたのは巨匠ゴットフリートのトリスタン[16]だった。少し離れた窓辺では妻がこちら向きに座って針仕事に没頭している。隣の部屋では娘が揺り籠のなかで眠っている。物音ひとつしない昼下がりの静寂。トリスタンとイゾルデ[17]とともに船旅に出ようというぼくを妨げるものは何もなかった。

船は大海原に漕ぎ出した[18]。昼下がりの物悲しいひととき，イゾルデは上甲板に腰を下ろしていた。夏の海風がイゾルデの金色（こんじき）の髪のなかを吹き抜けていく。だがイゾルデの瞳には涙が溢れんばかりになっていた。故郷を恋しく思う気持ちゆえに，また年老いた王が彼女を后にしようと待ち構えている異国への怖れゆえに[19]。トリスタン

---

16 ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタンとイゾルデ』のこと。シュトルムは近代語への翻案『トリスタンとイゾルデ』を所有していた。

17 シュトルムは „Isote" という表記を採用しているが，本稿では混乱を避けるため「イゾルデ」という呼称に統一する。

18 ここからの一節は『トリスタンとイゾルデ』11645 行～11706 行の略述。ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（石川敬三訳）『トリスタンとイゾルデ』195-196 頁参照。

19 モーロルトとの戦いで毒を塗った槍の攻撃に傷ついたトリスタンには，いかなる医者の手当ても効き目がなかった（註 20 参照）。この傷を治すことができるのはイゾルデの母親（＝アイルランド王妃）だけだとモーロルトから聞かされていたトリスタンは，ひそかにアイルランドに向かう。策をこらして首尾よく王妃（＝イゾルデの母親）に治療してもらったトリスタンは

はイゾルデを慰めようとする。しかしイゾルデはトリスタンを突っぱねる。トリスタンに伯父モーロルトを打ち殺されたせいで，イゾルデはトリスタンを憎んでいるのだ[20]。生温(なまあたた)かい風が吹いてきて，イゾルデは喉の渇きを覚えた。イゾルデの船室には愛の飲み物[21]が無造作に置かれている。それはイゾルデの心を年老いた王への恋に燃えたたせるための秘薬だった[22]。しかし幼い侍女が《おや、こんなところにワインがございますわ》と言ったばかりに，トリスタンが何も知らずに杯をイゾルデに差し出してしまう。

《ためらいつつもイゾルデは口をつけた　だが彼女にはこの酒は強すぎた
イゾルデは杯をトリスタンに渡す　そして彼もまたその酒を飲んだのである》[23]

音楽をもって王妃とイゾルデのそばに仕えるが，やがて口実を設けコーンウォールに帰る（ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク［石川敬三訳］『トリスタンとイゾルデ』第11章「タントリス」）。傷が癒えたトリスタンからイゾルデの美貌について聞かされたコーンウォールのマルケ王は，トリスタンの勧めもあり，イゾルデを妃としたいと思うようになった。トリスタンはマルケ王の意を受け，素性を隠して再びアイルランドに向かう（第12章「求婚の旅」）。アイルランドでは民が竜に困らされており，この竜を倒した者には，王からイゾルデが妻として与えられることになっていた（第13章「竜との戦い」）。トリスタンは正体を見破られたものの，マルケ王とイゾルデの婚約を整え，コーンウォールとアイルランドの和解も成立させる（第14章「こぼれ刃」）。竜を倒したトリスタンにはイゾルデが与えられることになり（第15章「証拠」），トリスタンはコーンウォールへ帰るべくイゾルデを伴って船で港を出る。だが船上でイゾルデは「自分がなじんでいる土地とすべての親しい人々に別れて，見も知らぬ国の人々と，行く先も，どうなるかも知らずに，航海しなければならないことを泣いて嘆いた」（第16章「媚薬」194頁）。

[20] かつてアイルランドは猛将モーロルトを使者にたてて，慣例に従いイングランドとコーンウォールに貢ぎ物（それぞれ少年30人）を要求してきた。こうした隷属状態を潔しとしないトリスタンは，名乗りでてモーロルトと一騎打ちを行い，この勇将を討ち果たした（石川敬三訳『トリスタンとイゾルデ』第10章「モーロルト」）。そのことを聞いて以降，アイルランド王妃とその娘イゾルデはトリスタンを憎むようになる（ベディエ編［佐藤輝夫訳］『トリスタン・イズー物語』31頁参照）。「『およしになって，船長，おどきになって。その腕をのけて下さい！あなたは本当にうるさい方ね。何だってわたしにおさわりになるの。』『おや，お美しい方，わたしのすることが間違っているのでしょうか。』『そうですとも，わたしはあなたを憎んでいるんですもの。』『いとしの姫よ，それはなぜでしょう。』『あなたはわたしの伯父をお手に掛けられました。』（石川敬三訳『トリスタンとイゾルデ』194頁）」　なおアイルランド王妃，つまりイゾルデの母親が，モーロルトの妹である。

[21] Minnetrank. 媚薬。惚れ薬。

[22] イゾルデの母親（モーロルトの妹）が娘の結婚生活を案じ，薬草を調合してワインに混ぜて醸した秘薬。これを飲んだ者どうしは「身も心も一つになって，生きているあいだも，死んでの後も，永久に愛しあってはなれぬ」（ベディエ編『トリスタン・イズー物語』59頁）というほどの効き目を持つ。マルケ王とイゾルデにのみ飲ませるように言い含めて侍女ブランゲーネに託すが（石川敬三訳『トリスタンとイゾルデ』193頁），別の侍女が知らずにその秘薬をトリスタンとイゾルデに飲ませてしまう。「とんでもない，そのびんの中に入っていたのは，ぶどう酒のように見えはしたが，その実，ぶどう酒ではなかった。それはいつまでも続く苦しみであり，無限の心痛であって，そのために二人は死ぬことになったのである」（同書196頁）。

[23] 「彼女はそれを長い間ためらってからいやいや飲み，次いでトリスタンに渡して彼も飲んだのであるが［…］」（石川敬三訳『トリスタンとイゾルデ』196頁）。

さて，こうして古代の詩人の魔術のような劇は始まっていく。ぼくたち読者は登場人物たちとともに，彼らの疑惑や，望まないのにそうなってしまわざるを得ない妖しい恋心，自由であることを信じつつも自由であることを怖れる恋心を体験していくのだ。[…]

はるか昔の詩人が読者の鼻先に漂わせる術を心得ていた杯の香りが湧きたって，その魔力をぼくにも及ぼし始めた。この作品のせいで，それまでの実生活が眠り込ませていた何かが，ぼくのなかで呼び覚まされた。ぼくは仮借ない独特の掟をトリスタンとイゾルデに強要する，このもうひとつの世界[24]にはなじみがなかった。作品の冒頭で述べられているとおり，詩人みずからも，このもうひとつの世界に身を委ねて，生きつつ死し，また死につつ生きようとしていたのだ[25]。』」[26]

『遅咲きの薔薇』をおおよそ半分ぐらい読み進めると，上掲の引用部分に差しかかる。事業にかかりきりになっていたかつての文学青年ルードルフが，束の間の休息を得て久しぶりに書物に手を伸ばしたのである。ここから『遅咲きの薔薇』の話は『トリスタンとイゾルデ』の物語に背景を彩られながら進行していく。

だが単に夫婦間の情愛を深く認識するというだけなら，どうしてシュトルムは『トリスタンとイゾルデ』の物語に言及する必要があったのだろう。なにしろ『トリスタンとイゾルデ』の物語はヨーロッパにおける「一つの偉大な姦淫の神話」[27]なのである。円満な夫婦関係を扱うのが眼目ならば，『遅咲きの薔薇』に『トリスタンとイゾルデ』の物語は似つかわしくないと思うのが普通ではないだろうか。

しかも『トリスタンとイゾルデ』の物語を読もうとするルードルフは，妻は針仕事にいそしんでおり娘は揺り籠のなかで眠り込んでいるので自分の読書を邪魔するものは何もない，とまで言い放っている。まるで『トリスタンとイゾルデ』の物語を読むときには，妻子の存在は忘れていたいと言わんばかりなのである。

ここでルードルフは，おそらく『トリスタンとイゾルデ』の物語を黙読したのだろう。妻子が居合わせても黙殺して，自分の読書に没頭していたらしい。確かに，トリスタンとイゾルデの二人が「『望まないのにそうなってしまわざるを得ない妖しい恋心』」[28]のとりこになっていく場面を妻の前で音読するというのは，憚られることだ。それは次の引用部分を読むと，いっそう明瞭になる。

---

24 実生活とは異なる世界，つまり恋の世界。

25 「わたしが志向しているのは，それ［＝どんな苦しみをも忍び得ず，ただ喜びの中にのみ浮かんでいたいというような，ありきたりの人］とは別の人々，心からなる喜びとあこがれの苦しみを，好ましい生といとわしい死を，好ましい死といとわしい生を，一つ胸の中に併せ持つ人々のことである。わたしはこのような生き方に生涯をささげ，このような人々の伴侶となって，彼らと生死を共にするつもりである。」（石川敬三訳『トリスタンとイゾルデ』2-3 頁）

26 LL-1, S.432 f.

27 ドニ・ド・ルージュモン『愛について エロスとアガペ（上）』34 頁。

28 LL-1, S.432.

「『[…] こうした庭の静けさに包まれて，ぼくは初めて誰にも邪魔されずに，太古の永遠の叙事詩に読みふけった。《オデュッセイア》―― それから《ニーベルンゲンの歌》にね。ぼくは声に出して読んだ。傍らに妻がいて，聞いてくれるものだから。そのうちに彼女は熱心な仕事の手を，知らず知らずのうちに休めてしまっているのさ。』」[29]

さきほど『トリスタンとイゾルデ』の物語を読んでいた場面では，妻に読み聞かせたとまでは書かれていない。むしろ妻子に居てもらっては具合が悪いというような書きぶりであった。

しかし，それとは対照的に，この引用部分でルードルフは，ホメーロスやニーベルンゲンを音読している。しかも妻に読み聞かせているのである。そしてトリスタンを読む際には場面が明示され，筋書が要約されさえしていたのとは裏腹に，ホメーロスやニーベルンゲンは，どの場面を読んだのかすら明らかにされていない。

これではまるで，ホメーロスやニーベルンゲンはどの部分を妻に読み聞かせても差し支えないがトリスタンはまずい，しかも二人が愛の飲み物を誤って飲んでしまう場面は殊にまずい，と無言のうちに告げているようなものである。

やがて四十歳の誕生日を翌日に控えた夜，ルードルフはまたしても『トリスタンのイゾルデ』の物語に読みふけった。翌朝，早く目覚めたルードルフは庭に出て『トリスタンとイゾルデ』の物語を反芻する。

「『前の晩，またしてもぼくは巨匠ゴットフリートの《トリスタン》に取りかかってね。あの古い物語に没入していたんだよ。詩人の優雅な手が紡ぎだす物語も，もう大詰めを迎えていた。

愛の飲み物は，その魔力を証明してみせた。美しい王妃イゾルデと王の甥であるトリスタン，二人はもう互いに離れられなくなってしまった。寛容な老王もさすがに，この二人の罪人（つみびと）を追放してしまう[30]。詩人の筆は高鳴る自らの胸の鼓動を満足させつつ，愛すべき登場人物たちを人里（ひとざと）離れた原野に連れ出していく。二人を追ってくる間者（かんじゃ）はいない。太陽は輝き，野の草が香りをたてはじめる。広漠たる静けさのなかに佇むのは，ただトリスタンとイゾルデばかり。二人を包むのは風にそよぐ森の木々のささめきと，森の上を飛ぶ鳥の絶え間ないさえずり。夕陽に照らされて二人は草原を歩いていく。泉がさらさらと涼しい音をたてているほうへと。二人は菩提樹の下に腰を下ろし，共寝の一夜を過ごした窟（いわや）を振り返る。日が昇ると，夜露に濡れた荒れ野に馬を

---

[29] LL-1, S.434.

[30] 「『わたしには不本意なことだが，そなた達がいつもわたしよりもお互い同士をいっそう強く愛し合っていることがわかったから，そなた達は気の向くように二人で一緒にいるがいい。[…] 手に手を取って，この宮廷と国から立ちのいてもらいたい。』」（石川敬三訳『トリスタンとイゾルデ』282 頁）

走らせて，二人は狩りに出る。弩(いしゆみ)を手に，馬の轡(くつわ)を並べて。イゾルデの金色の髪がトリスタンの肩にそよいでいる。』」[31]

ここは『遅咲きの薔薇』のなかで最も美しい場面である。ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの原作では「第 27 章愛の洞窟」に相当する。何度，読んでもうっとりさせられる理想的な牧歌世界とでも言うべき描写であるが，しかし，こうした美しい世界を二人がさまよっているのは道ならぬ恋の結果であるということを忘れてはならない。道ならぬ恋どころか，トリスタンとイゾルデの二人は、アイルランドからコーンウォールへ向かう船の上で，つまりこの引用部分に先立つ「第 17 章告白」の場面で，すでに許されざる一線を超えていたのである[32]。

さて前の夜に読んだ，マルケ王に追放されたトリスタンとイゾルデが二人きりで原野をさまよう場面から，翌朝，庭に出たルードルフは，いったい何を喚起されたのだろうか。

「『静まりかえった朝の空気のなかでトリスタンとイゾルデの世界が，夢幻のようにぼくの心に立ち昇ってきたんだよ。―― そうしているうちにも時は過ぎていく。太陽が暖かく庭の小径に降り注ぎ，木々の葉は朝露を滴らせる。花々のかぐわしい香りがあたりに漂い，空中では虫たちの羽音が奏でられ始める。ぼくは自然の豊かさを満喫した。すると突如として青春の感情がぼくのなかに湧き起こってきたんだ。まるで人生の秘奥が封印を解かれぬまま，目の前に横たわっているとでもいうかのように。』」[33]

許されぬ恋に走ったトリスタンとイゾルデの二人に触発されて，ルードルフに青春時代の感情がよみがえってくる。そして急ぎ足で庭から家に戻ったルードルフは仕事部屋の机の上に，ひとりの少女の肖像画が置かれているのを見出すのだった。

「『[…] ―― 絵の少女はやや頭を後ろにそらし，輝く金色の髪をちょうどいま片方の手でさっと後ろに梳(す)きあげたところのようだった。軽く笑みを浮かべた口元には，昂然たる若さがみなぎっている。

ぼくは息を飲んでその乙女の美しい顔立ちに見入った。ぼくが近くにいることを悟

---

31 『トリスタンとイゾルデ』第 27 章「愛の洞窟」に基く風景描写。LL-1, S.435.

32 「[…] 相思の二人が欲することを，かれら二人は度々存分に行った。折よく二人が一緒になれる好機に恵まれると，二人は少しも苦にならぬ利子や年貢を自分たちや恋に忠実に支払ったり受け取ったりした。[…]

こうして二人は日々を楽しみながら航海を続けたが，しかしそれは全く無償でというわけではなかった。というのは先立つ心配が彼らを苦しめたからである。[…] それは美しいイゾルデが心の染まぬ人のものとならねばならぬということであった。その上もう一つの悩みが二人の心を苦しめた。それはイゾルデがもはや処女ではないということであった。」（石川敬三訳『トリスタンとイゾルデ』「第 17 章告白」206-207 頁）

33 LL-1, S.435 f.

られてはならないような気がしてね。不用意なため息ひとつで，すべてが霞と消えていってしまいそうに思えたんだ。―― この乙女が笑みを浮かべながら目を向けているのは，春の日射しがゆったりと降り注いでいる世界に違いない。ぼくは覚えず頭(こうべ)を垂れた。これは ―― これは妻の若かりし日の姿なのだ。この乙女となら，ぼくだってあの広漠たる静けさのなかへ逃避したものを。誰もが一度は憧れる，あの人里(ひとざと)離れた原野に[34]。』」[35]

確かにトリスタンとイゾルデが逃れていった原野での，二人の暮らしは瑞々しく描かれていた。若き日の恋人と，そうした美しい自然の景物に囲まれたなかを共に歩むというのは，心躍る経験であるに違いない。

しかし再三にわたって指摘するように，よくよく考えてみれば，これはトリスタンとイゾルデの二人が背徳の恋ゆえに追放された結果なのである。どうしてルードルフは，かつて自分の恋人であり今は妻となっている女性とともに，そうした追放された二人が赴いた場所を志す必要があるのだろうか。

それはルードルフを描くシュトルムが，このルードルフの心に湧き出てきた感情が手放しで称揚しうる性質のものでないことを察知していたからに違いない。なるほどルードルフが妻への思いを新たにするということには何の問題もない。それは、むしろ称讃されるべき事態である。だが，シュトルムが意識的にそうしたのかもしれず，あるいは無意識のうちにそうなってしまったのかもしれないが，ともかくこのルードルフに湧き起こった感情は，どうやら妻だけに向けられたものではないらしいのである。

これを作者シュトルムにあてはめて考えると，新たに芽生えてきた感情は単に妻コンスタンツェに向けられたものではないということになる。だとすれば「『そうやってぼくもまた，愛の杯を傾けたのだよ。深く，そして大胆に飲み干したのだ。本当はもっと早く，そうしておけばよかったのだが ―― でも，まだ間にあったのだ』」[36]というルードルフの台詞を，額面どおりシュトルムが妻コンスタンツェに向けたものと受け取るわけにはいかない。

そもそも「妻」と「背徳の恋」に走ることは不可能だ。妻と仲睦まじくすることには，倫理的に何の問題もないのだから。ここでのシュトルムは『トリスタンとイゾルデ』の物語における若い二人の関係を背徳の恋と理解して，自らの作品に引き入れている[37]。シュトルムは、トリスタンとイゾルデの二人が互いに慕い慕われる熱い恋心の上澄みだけを，ルードルフの、妻への愛情を表すために利用しようとしたわけではないのである。

---

34 トリスタンとイゾルデが逃避していった原野。
35 LL-1, S.436.
36 LL-1, S.437.
37 ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの作品においては，トリスタンとイゾルデの恋はむしろ讃美されている感が強い。しかし本稿では，そうした二人の関係をシュトルムが自身の身辺状況に引きつけて，道ならぬ恋と見ている点を重視したい。

4

作中人物たるルードルフに託した作者シュトルムの感情は，いったい誰に向けられたものなのか。そのことに答えを出す前に，もうひとつ注目しておきたいことがある。それは作品名ともなった薔薇の花についてである。

「『ぼくはまず庭を現在の姿に整えた。そして向こうの低いほうに薔薇園を作った ── 君も知ってのとおり，妻は他のどんな花よりも薔薇が好きなんだ。── その翌年には薔薇園の向こうに広い四阿屋を建てた。』」[38]

「『家のなかでは物音ひとつしなかった。早朝の静寂が家の隅々にまで行き渡っている。だが瑞々しい薔薇の強い香りが，誕生日の卓が近くにあることを秘かに告げているようだった。── 仕事部屋の扉を開いたとき，楕円形の油絵が仕事机の上に立てかけられているのがぼくの目に飛び込んできた。それはひとりの少女の横顔を写した等身大の肖像画だった。肖像画を囲む荘重な金色の額縁には，赤いせいよういばらをふんだんに用いて編んだ花綵が掛けてあった。』」[39]

このようにルードルフの妻のいちばん好きな花は薔薇だと，シュトルムは書いている。また若き日の肖像画を薔薇を編んで作った花綵で彩るなど，ルードルフの妻にしきりに薔薇のイメージを植えつけようともしている。

ここで思い起こされるのは，シュトルムの周囲に薔薇の花のイメージをかぶせられた女性が存在していたことである。その女性とはドロテーア・イェンゼン。シュトルムの不倫相手で，コンスタンツェの死後，正式にシュトルムの妻となる女性である[40]。

大学生だったシュトルムがキールからフーズムに帰省したとき[41]，いちばん下の妹ツェツィーリエが連れてきた 13 歳の少女に，シュトルムはほのかな恋心を抱く。これがドロテーア・イェンゼンとの最初の邂逅である。やがてシュトルムは 1846 年 9 月 15 日にコンスタンツェ・エスマルヒと結婚する。シュトルムの主宰する合唱団（1843 年設立）には 18 歳になったドロテーアも加入していた。そして事件が起きるのである。

「フーズム市参事会員ペーター・イェンゼンの青い目をした令嬢の思いやり深い気立てのよさは ── コンスタンツェの持ちあわせていない性質であった[42]。弁護士テーオドールの地味な妻の親切そうな灰色の瞳が静かな暖かさを湛えているときでさえ，

---

38 LL-1, S.434.
39 LL-1, S.436.
40 コンスタンツェの死は 1865 年 5 月 20 日であり，シュトルムのドロテーアとの再婚は 1866 年 6 月 13 日であった。
41 おそらく 1841 年ごろ。当時シュトルムは 24 歳ぐらいであった。
42 「コンスタンツェは明るくて静かではあったが […] 非情熱的性格であり，これがシュトルムにとっては一番不満な点であった。」（宮内芳明『シュトルム』33-34 頁）

コンスタンツェの夫はドロテーア・イェンゼンに，感情の深さ，情熱，献身，完全な一致を感じていたのである。

テーオドール・シュトルムは，かつて，それほどぱっとしなかった少女に，抗しがたいほどの魅惑的な雰囲気をかぎつけた。ドーリスにおいても事態は同じだった。突如としてドロテーアは何もかもがどうでもよくなった。自らの情熱的な恋のために，ドロテーアは自身の名誉を犠牲にする。フーズム市参事会員の娘ドロテーア・イェンゼンは，自らの名声と将来，一族の名望を危険にさらして，恋の道に走ったのである。

こうしてシュトルムの市民的な生活秩序のなかに，衝撃的なひび割れが生じることになった。しかもそれは，あの時代には考えられないような，ほころびであった。シュトルムは不貞をはたらく夫となってしまった。」[43]

このシュトルムとドロテーアの関係は，コンスタンツェの妊娠を機にドロテーアが身を引くことで一応の決着を見る。つまり「1848 年 2 月にドロテーアは他の町で家事手伝いをすることになり，フーズムを出て行った」[44] のだが，シュトルムのドロテーアへの思いは，これで断ち切られたわけではなかった。

ドロテーアに去られたあとのシュトルムは，六篇の詩からなる連作詩『赤い薔薇の書』を 1848 年 2 月 28 日付で雑誌『ヨーロッパ』の編集部に送る。当時としては，あまりに官能的すぎたせいで印刷されることはなかったが[45]，これらはコンスタンツェとの結婚後のシュトルムがドロテーアへの募る思いを綴った作品群なのである。

その『赤い薔薇の書』という表題のもとにまとめられた詩のうち，薔薇が歌い込まれている第三番を見ておこう。

またしても

またしても　一輪の赤い薔薇が
ぼくの膝に　情熱を撒いてくる
またしても　ぼくは　あの乙女の瞳に
我を忘れて　夢中になる
またしても　乙女の若い胸が
ぼくの胸に　その鼓動を伝えてくる
またしても　ぼくの額に

---

43 Göhler, S.123.
44 宮内芳明『シュトルム』36 頁。
45 「心を奥底から揺すぶる情熱が，官能的にこの上なく熱烈な恋愛詩となった。詩としても『危険な材料』であることを，作者は認めている。彼はドーリスへの灼熱の詩六編を『赤いバラの本』という題にまとめ，雑誌に送ったが，掲載を拒否されたほどである。」（高橋健二『作家の生き方』32-33 頁）

六月の暑い陽光が　照りつけてくる[46]

この詩から分かるとおり，シュトルムはドロテーアを「一輪の赤い薔薇」にたとえている。この詩に限らず，後年ドロテーアを扱った『三色すみれ』[47]においても，シュトルムは作品の基調となる雰囲気を薔薇の花とその香りに託している。

このようにシュトルムが薔薇の花を用いて表そうとするのは，いつもドロテーア・イェンゼンなのである。その意味で『遅咲きの薔薇』は作品名からしてすでに，ドロテーアの存在が影を落としているノヴェレだと言えよう。

さて，ここへ来て，シュトルムが『遅咲きの薔薇』で，どうして『トリスタンとイゾルデ』の物語を必要としたのかということへの答えが，やっと見えてきたようである。つまり，シュトルムが登場人物ルードルフの姿を借りて追放されたトリスタンとイゾルデの二人のように原野をさまよいたいと願ったとき，その思い描いた相手は妻コンスタンツェではなくドロテーア・イェンゼンだったのである。妻子ある身でありながら，愛人ドロテーアとの逃亡を思い描く。だからこそシュトルムは背徳の恋に走る二人を描いた『トリスタンとイゾルデ』の物語を必要とした。この場合，トリスタンの位置にはシュトルムが，イゾルデの位置にはドロテーアが納まることになる。シュトルムは『遅咲きの薔薇』において外面的には妻コンスタンツェを描きながら，実はその深奥にドロテーアのへの思いをも潜ませていたのだった。

従来の研究が述べてきたように[48]，確かに表向きにはルードルフと妻，すなわちシュト

---

[46] LL-1, S.21.

[47] „Viola tricolor“（執筆 1873 年／初出 1874 年）。

[48] たとえばヨハネス・クラインはルードルフと妻とに「中年の二人における初恋」を見ている（Klein, S.237）。またデイヴィッド・A・ジャクソンに次のような見解がある。「企業間の競争は長年にわたってルードルフに，すべての労力を事業の構築に捧げるよう強いてきた。ルードルフには文学や美術に打ちこむ時間は残されていない。妻とのエローティッシュな関係も損なわれてしまった。妻自身も，娘ふたりの面倒を見ることに没入しきっている。ルードルフは事業にがんじがらめにされることがなくなったときに初めて，自らの疎外を克服したのだった。〈蘇生〉はルードルフの 40 歳の誕生日の朝に起きた。若かりし日の妻を描いた肖像画を目にした瞬間に，ルードルフは自分の運命が『トリスタンとイゾルデ』の運命と重なりあっていることを自覚する。トリスタンとイゾルデの二人は庭の四阿屋で愛しあった。このときからルードルフの妻は，イゾルデの官能的充実とイフィゲーニエの精神的な美と尊厳とを，一身に体現するのである。」（Jackson, S.125）　ジャクソンは『遅咲きの薔薇』や『大学時代』といった作品の根柢には，シュトルムの「生活を美的に構築することへの希求」（Jackson, S.55 u. S.119）が流れていると指摘してもいる。確かに，そうであるだろう。だが，そうした，たとえば『トリスタンとイゾルデ』に導かれるような絢爛たる美の裏に何が潜んでいるのかということをも，掘り下げて考えなければならない。さらにジャクソンは『遅咲きの薔薇』における裕福な生活の描写は，当時ハイリゲンシュタットで極度に切りつめた生活を送ることを余儀なくされていたシュトルム一家の願望の反映であるとも述べている（Jackson, S.121）。そういう側面もなきにしもあらずだが，一見，満ち足りた生活を描写する裏で，作者シュトルムの，いかなる感情がうごめいているのかということに注意を払う必要がある。ジャクソン自身の表現を借りれば「イゾルデの官能的充実とイフィゲーニエの精神的な美と尊厳とを，一身に体現」した妻であるからこそ，背徳の道に走った場合には，夫の罪悪感はいっそう深刻なものになるのではなか

ルムとコンスタンツェの仲は，さらに親密の度を加えていきそうではある。一見，二人の関係には，なんら後ろ暗い点はないように思われるからである。

だが事態はそれほど単純ではない。表面的には円満な夫婦を描いたこの作品の深層に潜む不倫の恋への衝動は，いずれ噴出せずにはいられぬ深刻な性質のものだった。『遅咲きの薔薇』では〈暗い水〉はまだうごめいていないというに過ぎない。シュトルムにおけるコンスタンツェとドロテーアの板ばさみになる苦悩と葛藤は，後年『三色すみれ』において再度，扱われ，そこでシュトルムは〈暗い水〉と死闘を演じることになるのである。

『遅咲きの薔薇』では，ルードルフの妻にコンスタンツェのみならずドロテーアの姿も重ねあわされていたため，ドロテーアに対応する登場人物が単独で存在していたわけではなかった。ルードルフの姿を借りてシュトルムが拝跪する相手は，コンスタンツェなのかドロテーアなのか，はっきりしないのである[49]。

だが『三色すみれ』では，コンスタンツェ，ドロテーアの双方に対応する女性登場人物が姿を見せる。そのため，不倫もしくは重婚という罪悪は目に見える形で提示されることになった。〈暗い水〉との格闘が，すさまじいものになる所以である。しかも男性主人公には，『遅咲きの薔薇』の主人公に託された作者シュトルムの思いを受け継ぐかのように，またしてもルードルフという名が与えられているのである。

シュトルムは『遅咲きの薔薇』において，意識的にせよ，無意識的にせよ，ドロテーア・イェンゼンへの秘められた思いを吐露していた。『遅咲きの薔薇』は決して円満な夫婦関係を描いただけの作品ではない。一見，円満な夫婦関係に見えるものはこの作品の表層に過ぎず，その裏では危険な内容が扱われているのである。

もちろん『遅咲きの薔薇』は単なる問題提起もしくは序章に過ぎず，この作品の主題は『三色すみれ』の執筆を待って，ようやく本格的に扱われることになったとは言いうるであろう。とはいえ，短くはありながらも『遅咲きの薔薇』は，シュトルム文学の本質である「市民の生活秩序とそれを乱すものの葛藤および相克」という構造を含んだノヴェレである。シュトルムの作品世界を理解するための手がかりを与えてくれる重要な作品として，このささやかなノヴェレはもっと注目されてしかるべきなのである。

ろうか。その意味で宮内芳明氏の次のような指摘は，重く受け取られるべきである。「永遠に美しいシュトルム文学の源泉はこのドロテーアにあるといっても過言ではないのである。この道ならぬ恋を源泉として，数々の世界的な詩やノヴェレがこんこんと湧き出してきたのだった。」（宮内芳明『シュトルム』37頁）

[49] むろん，これはシュトルムが筆をぼかしているのである。シュトルムが跪く相手が妻なのか愛人なのか不分明であるうちは，〈暗い水〉も手の出しようがない。

※ 本稿は第58回日本独文学会中国四国支部研究発表会（21. Nov. 2009 / 於：香川大学）における筆者の研究発表に基いている。研究発表会における質疑応答の場および懇親会の席上において，懇切なご指導を賜った皆様に，心より御礼申しあげる。

【文献】

Storm, Theodor : *Sämtliche Werke in vier Bänden.* Bd.1. Frankfurt am Main 1987. [=LL-1]

Klein, Johannes : *Geschichte der deutschen Novelle von Goethe bis Gegenwart.* Wiesbaden 1954. [=Klein]

Göhler, Ch. : *Ein Leben für die Grauen Stadt.* Rendsburg 1987. [=Göhler]

Vinçon, Hartmut : *Theodor Storm.* Reinbeck bei Hamburg 1991. [=Vinçon]

Fasold, Regina : *Theodor Storm.* Stuttgart / Weimar 1997. [=Fasold]

Jackson, David A. : *Theodor Storm. Dichter und demokratischer Humanist.* Berlin 2001. [=Jackson]

シュトルム（関泰祐訳）『みずうみ 他四篇』 岩波文庫 1992[49].

高橋健二『作家の生き方 シュトルム カロッサ ケストナーの場合』 読売新聞社 1972.

カルル・エルンスト・ラーゲ（田中宏幸・田中まり訳）『シュトルムの生涯と文学』 芸林書房 1991.

宮内芳明『シュトルム』 清水書院 1992.

加藤丈雄『シュトルム・回想と空間の詩学』 鳥影社 2006.

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（石川敬三訳）『トリスタンとイゾルデ』 郁文堂 1992[5].

ベディエ編（佐藤輝夫訳）『トリスタン・イズー物語』 岩波文庫 2005[66].

ドニ・ド・ルージュモン（鈴木健郎・川村克己訳）『愛について エロスとアガペ（上）』 平凡社ライブラリー 1993.

※ これらの文献に言及する場合，書名は誤解のない範囲で略記した。また，作品および独文参考書を引用するに際しては，筆者自身の訳文を用いた。

Ein Nachkömmling Tristans

—— Warum hat Theodor Storm in seiner Novelle „Späte Rosen" Gottfried von Straßburgs „Tristan und Isolde" erwähnt? ——

Shota TABUCHI

Man hat bisher Theodor Storms Novelle „Späte Rosen" für ein Werk gehalten, das ein friedliches Familienleben beziehungweise das tägliche Zusammenleben eines Ehepaars schildert. Zum Beispiel hat Beate Charlotte Göhler in ihrer umfangreichen Storm-Biografie geschrieben, dass Theodor Storm mit diesem Werk seiner Frau Constanze eine Liebeserklärung machte („Ein Leben für die Graue Stadt" S.198).

Wenn man diese Novelle nur oberflächlich liest, ist es eine mögliche Folge, dass man „Späte Rosen" als eine Art von Liebesdichtung zwischen zwei Ehepartnern ansieht. Aber mit Hilfe des Schlüsselworts vom „dunklen Wasser", der Geschichte „Tristan und Isolde" und dem Symbol der roten Rosen lässt sich dieses Werk tiefer verstehen.

In „Späte Rosen" schildert Storm zwar scheinbar gleichgültig die Ostsee; „[…] und wir saßen nun, die alte Zeit beredend, auf der breiten Terrasse vor dem Hause, von der man über den tiefer liegenden Garten und über eine daran grenzende grüne Wiesenfläche auf das dunkle Wasser der Ostseebucht und jenseits dieser auf sanft anstiegende Buchenwälder hinaussah […]" („Sämtliche Werke in vier Bänden" Bd.1. S.427 f.). An dieser Stelle darf man aber die Erwähnung des dunklen Wassers der Ostsee nicht übersehen.

In den Stormschen Novellen sind die Szenen mit dunklem Wasser fast immer bedeutungsvoll. Denn das dunkle Wasser warnt die Gestalten, die die moralische Ordnung des bürgerlichen Alltagslebens verwirren wollen. Einen Verstoß gegen das moralische Gesetz der bürgerlichen Welt stellen hier zum Beispiel der sündige Umgang mit der Verheirateten, die Doppelehe und die standeswidrige Eheschließung zwischen den Geliebten dar. Die Figuren, die sich solche Handlungen zuschulden kommen lassen, werden ins Wasser hineingezogen und wären beinahe ertrunken.

Dies ist die Warnung aus dem dunklen Wasser. Wenn man, wie Reinhardt in der Novelle „Immensee", solche unmoralische Handlungen unterlassen kann, so kommt man unverletzt zur irdischen Welt zurück. Wer aber jene Warnung außer Acht lässt, wird in dem dunklen Wasser ertrinken. Darum muss der Leser die Szenen mit dem dunklen Wasser in den Stormschen Werken immer aufmerksam beobachten.

Da Storm am Anfang des Werkes das dunkle Wasser schildert, haben wir keine

andere Wahl, als diese Novelle aus dem Blickwinkel der bürgerlichen Moral zu betrachten. Auf diese Weise ist die Warnung aus dem dunklen Wasser der erste Schlüssel, die Novelle neu zu erhellen.

Der zweite Schlüssel ist die Geschichte von „Tristan und Isolde". Die Hauptfigur Rudolf in „Späte Rosen" erlebt die Welt von „Tristan und Isolde" nach; „[…] Und nun beginnt das Zauberspiel des alten Dichters; wir leben mit ihnen [=Tristan und Isote] in ihrem Zweifel und in ihrer Herzensgier, wie sie nicht wollen doch müssen, wie sie noch glauben frei zu sein und dennoch fürchten es zu werden. […]" (Ebd. S.432.). „Der Minnetrank hat seine Zauberkraft bewährt. Die schöne Königin Isote und Tristan, des Königs Neffe, sie konnten von einander nicht lassen. Der alte langmütige König hat endlich die Schuldigen verbannt; […]" (Ebd. S.435).

Wenn Storm nur die Absicht gehabt hätte, ein friedliches Familienleben zu beschreiben, hätte er „Tristan und Isolde" nicht erwähnt. Denn „Tristan und Isolde" ist, wie oben erwähnt, ein typisches Werk der „Ehebruch-Literatur" in Europa.

Der dritte Schlüssel ist das Symbol der roten Rosen. Sogar nach seiner Heirat mit Constanze, geborene Esmarch, hat Storm mehrfach in seinen Werken Dorothea Jensen, seine Geliebte, symbolisch mit roten Rosen dargestellt. Auch in dieser Novelle schmückt Storm das Bildnis der Hausfrau mit roten Rosen. Überdies kommt das Wort „Rosen" im Titel des Werks vor. Daher kann man vermuten, dass Rudolfs Frau in diesem Werk nicht die Frau des Autors, sondern seine Geliebte widerspiegelt.

Nur zum Schein schildert Storm in „Späte Rosen" seine Frau Constanze, in der Tiefe handelt es sich um seine Geliebte Dorothea. Tatsächlich ist „Späte Rosen" kein Werk, das das Stormsche friedliche Familienleben spiegelt, sondern ein Werk, das ein gefährliches Gefühl gegenüber seiner Geliebten unwillkürlich äußert. Storm war in seinen Gefühlen zwischen Constanze und Dorothea hin- und hergerissen. Dieses problematische Thema wird nach 14 Jahren, also nach dem Tod Constanzes und nach der Heirat Storms mit Dorothea, in der Novelle „Viola tricolor" neuerlich behandelt. Diese Tatsache zeigt, wie tief und ernst das Thema für Storm war.

In der vorliegenden Arbeit wird versucht, die Stormsche Novelle „Späte Rosen" aus der Perspektive der „Ehebruch-Literatur" neu zu interpretieren. Seine Novelle „Späte Rosen", die das Innerste des Stormschen Herzens spiegelt, sollte in der Forschung einen höheren Stellenwert als bisher erhalten.

正誤表

19頁8行、11行
(誤) 溺れかける　→(正) 溺れかける

19頁9行、14行
(誤) 溺死　→(正) 溺死

20頁25行
(誤) 溢れんばかり　→(正) 溢れんばかり